ブッダと白隠禅師展

図録のご紹介

『ブッダと白隠禅師展』図録の特徴

本図録は、展示作品の他、白隠禅師が書き込みをした注法華径、白隠禅師座像の写真など多くの資料を収載し、また「今日の世情を鑑みるに、気候変動や人心の悪化に加え、新型コロナウイルスの流行も伴い、人は不安にさいなまれ、社会も安定を失っている。このような時にこそ、不安をいだく心を大安心へと転じ、真に安定し得た偉大な人格に触れることは、事柄の本質的改善に非常に大切なことである」との思いから企画された本展覧会にふさわしい内容を盛り込んだ、「読む図録」として編纂されています。特に、シャーキャムニ・ブッダ（釈迦牟尼仏）はどういう生涯を送られ、何を我々に教えられたのか、またその教えを江戸期に禅の形で具現化した白隠禅師が示された「悟りの仏道」とは何か（＝仏道はどう歩まれるべきか、言い換えれば、人はどこまで変われるものであるか）が伝わるよう、できるだけ配慮し詳細な解説および注を施してあります。

32

大灯国師

所蔵 / 永青文庫

[顧鑑咦] 古人刻苦、光明必盛大也、不信看取此老漢
瓜を手なしにくりやるなら　成程足なしで参ろう
[白雪] [惠宿之印]

古人の刻苦なる、光明、必ず盛大なり。信ぜずんば此の老漢を看取せよ。
瓜を手なしにくりやるなら、成程足なしで参ろう。

「顧鑑咦」などの関防印と、「白隠」などの落款を、賛の原文の前後に示すことにしました。

128×55.8

書画はすべて高精細スキャニングによるデータをそのまま使用しています。

書画に添えられた賛のことば、あるいは解説文に出る難語に注を施して読解の便をはかりました。

賛の後半は、前の絵図の賛と同様である。

ところで前掲の『槐安国語骨董稿』には、賛の意味するところの説話とともに、その姿を、「首、飛蓬の如く、席を被ぶり虎視牛行す」と記している。

この記述を如実に描く、「虎視」に怖ろしさすら覚えるこの画は、まさに仏道を真正に生き抜く「古人刻苦」の姿である。

この「古人刻苦、光明必盛」という八文字の二句は、睡魔に襲われると自分の腿に錐を刺して眠気と戦った(「慈明自錐」という)石霜楚円(九八七～一〇四〇)の『禅関策進』の最後に付されている「重刻禅関策進後序」の中に出る語。

「昔、慈明、汾陽に在りし時、大愚・瑯琊等、六、七人と伴を結んで参究す。河東、苦寒なり。衆人、之を憚る。明(＝慈明)、独り通宵坐して睡らず。自ら責めて曰く、『古人の刻苦なる、光明、必ず盛大なり。我、又た何人ぞ。生きて時に益無く、死して人に知られずんば、理に於いて何の益か有らん』と。即ち錐を引て自ら其の股を刺す。翁、此に至って志氣、憤激して、醍醐を呑むが如し。」

我が国に伝えられた禅宗に二十四派あるうち、法を嗣ぎうる弟子を得ず、その多くは絶えてしまったなかで、ひとり大応国師が伝えた楊岐派のみ、大応国師の門下に大灯国師が現れ、嗣法の弟子にまた関山慧玄現れ、やがて白隠禅師が中興して光明いよいよ盛大を見たのである。それは、ひとえに古人刻苦、すなわち二十年にも亘る長養あってのことである。

【刻苦】
力を尽くし心を労する。つぶさに骨身を削り努める。「刻」には、きびしい、むごい、いためる、尽くす等の意がある。

【飛蓬】
文字通りには「風のまにまに地上をころがってゆく枯れたよもぎ。」頭髪の乱れたさまのたとえ。

【虎視牛行】
虎のような目つきで牛のようにゆったり歩く。鋭く物事を見通しながら、地に足のついた確かな歩みをすること。

【河東】
黄河の東岸地方。特に汾陽が位置する山西省の西南部をさす。

【苦寒】
きびしい寒さ。極寒。

【通宵】
夜どおし。一晩中。

白隠禅師の高弟である東嶺和尚が、大いなる仏法が絶えることなく伝承されることを願い著した「宗門無尽灯論」にもとづき書画を全七章に分類、またその章名が意味する内容を簡潔に示しました。

《図録体裁》 寸法:横 220mm 縦 300mm/本文 152 頁/カラー版/平綴製本/見返し・表紙カバー

図録「ブッダと白隠禅師展」
発行：「ブッダと白隠禅師展」図録発行委員会　2021 年 7 月 18 日 初版
監修・図版解説：堀内伸二 / 監修協力：宮本圓明 / 写真・「白隠禅師の足跡」解説：丸山勇
印刷・製本：株式会社ハシモトコーポレーション

●本図録の入手方法などの詳細については日印文化交流ネットワークの下記ホームページの「お知らせ」のページをご覧ください。
つながる！インディア　https://tsunagaru-india.com/